

日本画を世界画へ…

ヨーロッパの美術館を巡る

〈宮廻正明の個展〉

現在の宮廻正明は画家として、東京藝術大学大学院の教授として、非常に幅広い仕事を行っている。藝大の文化財保存学では、新しい技術を開発して修復技術の複数の特許を取得し、また日中合作オペラ「遣唐使」の総監督としてその開催に尽力する一方、障害者アートの育成なども手掛けている。豊かな才能がマルチの活躍を可能にしているようだが、それぞれの活動のその根の部分は共通して「日本の文化の力で世界に大きく貢献できる」ということに繋がっている。

宮廻正明の国際的な作品発表は「日本画を世界画に」という、大きな目標を掲げて行われている。伝統技法を踏まえた宮廻の新しい表現は、現代アートとしての内容を十分に備え、今後の世界の美術の在り方を示すものだという自信にも裏付けされている。

こつた強い信念を持った画家が、日本の文化をしっかりと背景にして世界で活躍しようとしている。



〈Eternal Moment〉 2010年 100F



——ヨーロッパのふたつの美術館で個展が決まっているということですが、これは一昨年ロシアのモスクワとサンクトペテルブルグのふたつの国立美術館で行った作品発表が好評だったことと関連して発展したものですか。

宮廻 今回の展覧会は先方の美術館が展覧会を開催したいということから始まったわけですが、そうなったのは、ロシア等で発表した作品の評価からこの個展に繋がっていきました。

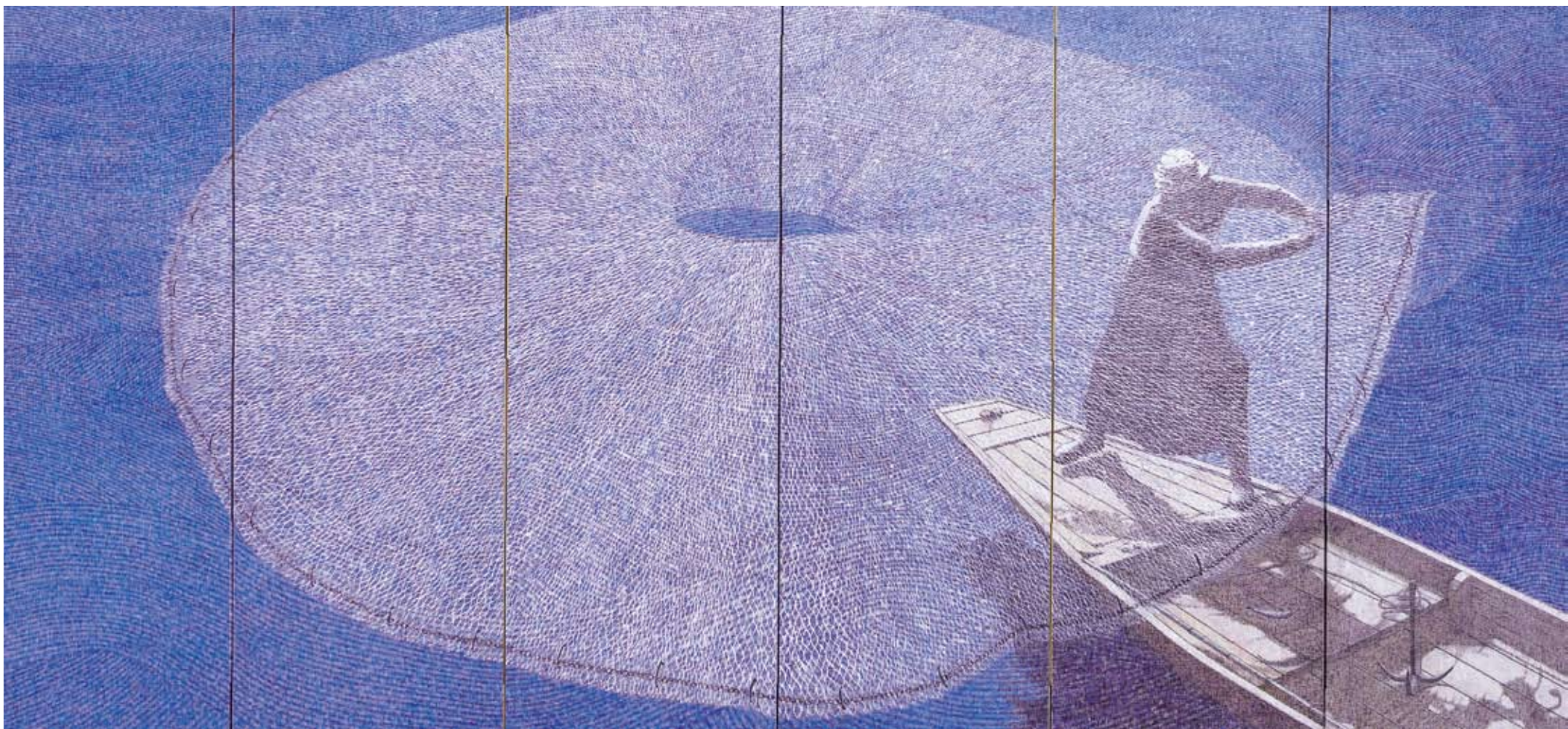
——今年はどこらの美術館でやりになるんですか。
宮廻 ハンガリーのブダペスト歴史博物館で10月10日から11月10日まで、ポルトガルのリスボンの東洋美術館で11月20日から12月29日までとなっています。両方とも国立でグレードはその国のトップクラス、日本では例えば東京国立博物館と同様なクラスになると思います。

——海外の美術館から正式なおファーが来て個展を行うというのは、日本人の画家としては少ないことでしょうか。
宮廻 日本在住の画家としてはめずらしいのではないでしょうが、作品はどのくらい出品なさるんですか。

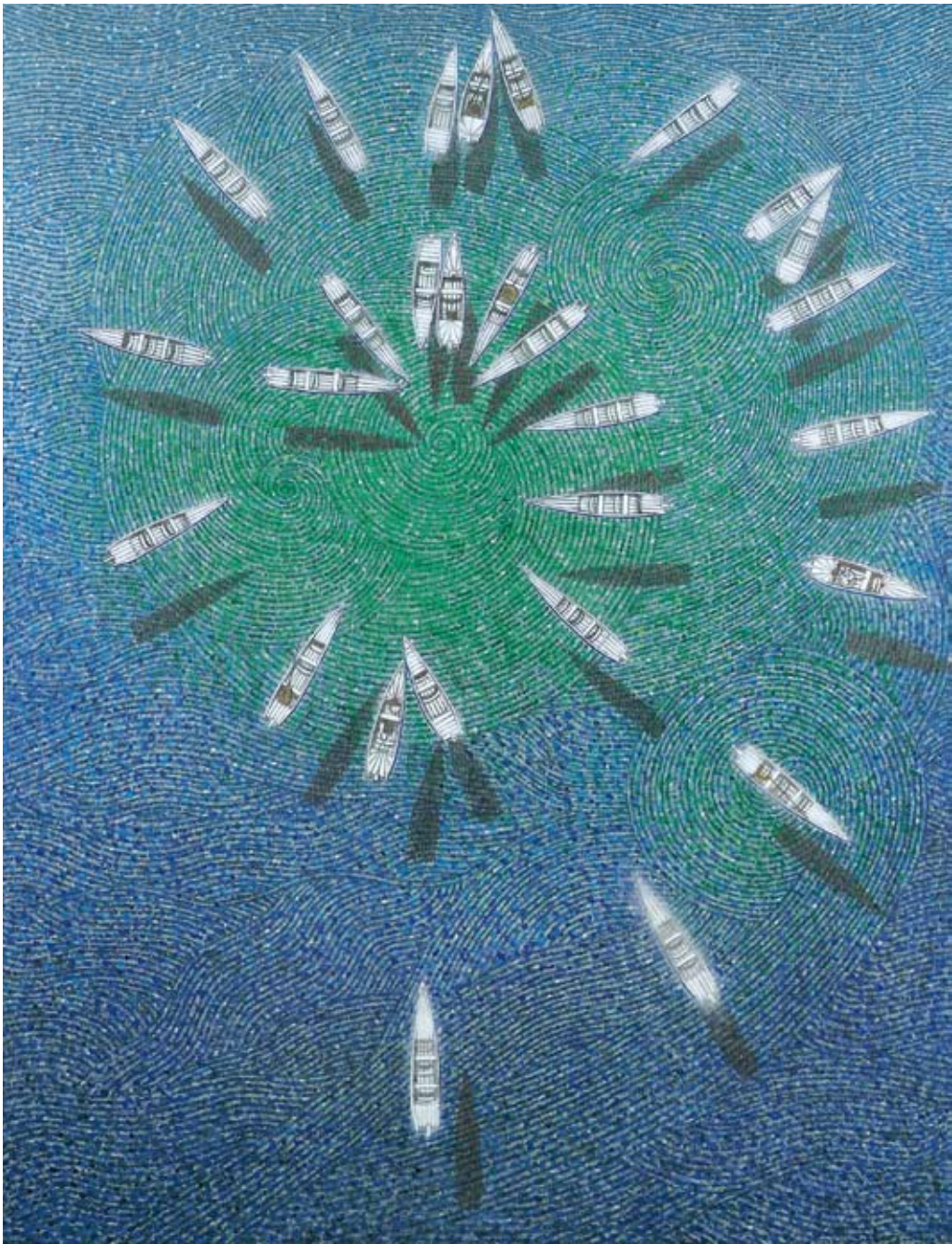
宮廻 今のところ40点くらいを考えています。屏風が6、7点くらい、あとは100号と50号と素描なども含めてです。

——屏風が多いのは圧巻ですね。
宮廻 そうなんです。ほんとは10点くらい飾ろうかと思つたのですが、あんまり屏風だけよりも、他の作品を入れたほうがいいのかと思ひました。題材は今まで描きためたものですけど、全部新作で額縁を付けなくて持っています。屏風は縁が付いているからそれだけで現代アートみたいなものですけど、あとは全部むき出しで持って行きます。

——日本画を現代アートとして正々堂々と出品するのは画期的ですね。
宮廻 今、日本というのは鎖国



《水花火 (蝶)》 2010年 屏風 (180.0 × 360.0)



《Concerto》 2008年 50F

しているように、日本画と油絵というカテゴリーで分けています。こんなカテゴリー分けをしているのは、日本だけしかなくて、世界ではまったく通用しません。世界ではファインアートかコンテンポラリーかという分類をしています。だから日本画の中にもファインアートもあればコンテンポラリーもあるという訳です。

——つまりコンテンポラリーの日本画だと認められたということですね。

宮廻 そうです、コンテンポラリーアートに入る。海外でも最初からそれをきちんと分けてしまう。日本画の中でもこれはコンテンポラリー、これはファインアートというように。私の場合は世界のジャンル分けではコンテンポラリーの類に入っています。

——コンテンポラリーというのは、どんな定義なんですか。

宮廻 コンテンポラリーというのは、オリジナルの技法、考え方を持っているか。そして、作

品の中にメッセージ性、哲学があるかどうか。このふたつが一番大きな要素だと思います。日本画もそういう要素のものもあるし、ものを写真的に写しているだけのものもある。旧態依然と伝統的な技術を受け継いで、描いているのではなく、自分のオリジナルを入れて描き方もある。私の場合は、裏彩色という自分独自の絵画技法を持っていますから、これがオリジナルとして世界で通用するのです。裏彩色というのは古典技法に裏打ちされているということで、日本の伝統を受け継ぎながらも、自分の新しいものに特化していくという、ある意味では最もコンテンポラリーらしいところであると思います。新しいだけではなく、伝統に裏付けされた中から派生した新しいもの、これが最終的には世界に定着していくのだろうと。そういう意味では、日本というのは常に伝統的なものを踏まえながら新機軸を開発している。それは世界にとっての現代アートのひとつの指針

として方向性を示していると言えます。ただ、変わったものやればいいのではなくて、きちっと根があつて、裏付けされている芸術というものが、そこでど

ういう新しいものを表現しているのかということが、今後大きく現代アートを左右していくでしょう。今回、非常にありがたいことは、ヨーロッパの国立の





《Narrow Victory》 2011年 120F

美術館が評価してくれたということ。今まで海外の美術館は日本の絵画に目を向けてこなかったんですが、今回は向こうからやりたいと、お話をいただきました。そのへんが非常にものの見方の尺度が日本の美術館と違うところですね。だから日本画だから一律ということではなくて、その中にも、世界に通用するものがあると、そういう見方をしています。

——ジャンルではなく個々の作家として見てくれて評価するということですね。

宮廻 そうなんです。すべて個々の評価でいくというのが世界の国立美術館の大きな違いです。日本だと一律でカテゴリー分けしてしまっています。でも外国の美術館にはまったくそれがありません。

——今回の展覧会で作家個人として認められると同時に、日本画の理解にも繋がるということも考えていますか。

宮廻 日本画の持っている優れた部分を世界に紹介していき

いと気持ちとはとても強いですね。それは技術的なことではなく、精神性が優れているという、哲学がきちつと作品に入っているということがこれからすごく芸術性で大切になってくるし、哲学のない作品は残っていかないと思います。

——その哲学とは、どういう哲学ですか。

宮廻 私の場合は、螺旋というものに置き換えて考えています。永遠の生命体の原点というのは螺旋形でできています。最初から作爲で螺旋を描くのではなくて、絵を描いていると自然に螺旋形態ができてくる。螺旋形というのはある意味でそこに生命体が存在する、宇宙が存在するというものを描いていることになりません。そういう意味では自分の中に常に宇宙を持っている。日本の作家



《螺旋遊》 2010年 屏風 (180.0 × 360.0)



宮廻正明プロフィール

- 1951年 島根県松江市に生まれる
- 1979年 東京藝術大学美術学部デザイン科卒業
- 1981年 東京藝術大学大学院美術研究科保存修復技術日本画修了（平山郁夫に師事）
- 1988年 東京セントラル美術館日本画大賞展優秀賞受賞
- 1992年 日本美術院特待推挙
- 1993年 再興第78回院展 日本美術院賞（大観賞）受賞
日本美術院奨学金前田青邨賞受賞
- 1995年 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学日本画助教授
日本美術院同人推挙
- 1999年 再興第84回院展 文部大臣賞受賞
「Duet '99」 アッバス・キアロスタミ 宮廻正明二人展（銀座・彌生画廊）
- 2000年 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学日本画教授
- 2001年 「Duet 2001」 アッバス・キアロスタミ 宮廻正明二人展（渋谷・東急本店）
- 2002年 再興第87回院展 内閣総理大臣賞受賞（文化庁買上げ）
画集「水花火」（小学館刊行）
- 2005年 東京藝術大学大学院映像研究科開設に参画
森鷗外訳オペラ「オルフェウス」舞台美術担当（東京藝術大学奏楽堂）
- 2008年 個展「ロシアアートフェア」
- 2010年 個展「日本の美」展 ロシア国立美術館
ロシアアートフェア（アートモスクワ）
- 2011年 新曲オペラ「遣唐使」芸術監督 舞台美術 東京藝術大学奏楽堂
個展「台北アートフェア」（アート台北）
- 2012年 「軽井沢の風展 日本の現代アート1950-現在（いま）」軽井沢ニューアートミュージアム
北京ビエンナーレ（北京）

- 天満屋広島八丁堀 7階 美術画廊 1月16日→1月22日
- 軽井沢ニューアートミュージアム 2月8日→3月31日
東京藝術大学デザイン科出身 4つの個展
- ブダペスト歴史博物館（ハンガリー） 10月10日→11月10日
- 東洋美術館（ポルトガル・リスボン） 11月20日→12月29日

の中で歴史に残っている尾形光琳、伊藤若冲、速水御舟の全の中に螺旋が存在しています。それは螺旋という名前のひとつの生命体が存在しているということなのです。それは、世界でも通用するんじゃないか。世界進出という意味では、生命体という形で、世界に進出できるのではないかと。これはすべてにおいて共通認識じゃないかと考えています。

——すでに世界に出すものは、日本にあったんですかね。

宮廻 あったのも確かだし、無かったのも確か。日本という井の中で、自分たちで外へ出ていこうとしなかったり、外のものを入れようとしなかったひとつの世界があるわけです。鎖国です。この鎖国というのは非常に面白く、内部で発酵していく。だけど、ほとんどのものが腐ってしまいうのですが、そのなかの何点かは腐らないで発酵して、大きく変化していく。美酒になった可能性がある。鎖国を続けたことによって発酵したものを世

界にだしていければ評価されると思います。

——そのトップランナー的な自覚はあるんですか。

宮廻 ええ、やっぱり自分ができていかなければと思います。自分だけじゃなくて、日本の芸術を世界に出さなくてはいけない時代がきています。その役割を誰かがやらなくてはいけないという意識は非常にあります。日本から発信して最後は日本に帰ってくる、一周りして日本に帰ってきた時にはグレイドアップしていたいという、それも螺旋形です。

——日本画が世界画へという大きな目的ですね。

宮廻 オーストリアのウィーンとか、イタリアのフィレンツェでも展覧会をしてみたい意向があります。これからどんどん各国の国立美術館の展開を広げ、最終的にはアメリカを周って日本に帰ってきたいと思えます。

——これからの展開が楽しみです。今日はお忙しいところありがとうございます。



《組曲》 2012年 100F